

生き物を大切にしようとする思いを通してより思考を深めていく子ども — 年長 5 歳児「生き物を大切にしよう」の実践から —

1 7 期のねらい

- ◎植物・虫などの変化や命の存在を感じ、生き物を大切にしようとする
- 互いに自分の思いを伝え、数人の友だちとイメージを共有しながら遊んでいこうとする
- 遊びがおもしろくなるように、考えたりいろいろなことを試したりしながら遊び、めあてを実現しようとする。
- クラスの友だちの良いところを知り、自分から友だちに関わろうとする
(◎は特にこの実践と関わりが深い期のねらい)

2 保育の構想

(1) 子どものとらえについて

年長になり、子どもたちは、テーブルの準備などの当番の仕事をすすんでしたり、知っている年少児を気かけ、年少児が使ったものも片付けたりと、年長になったことを意識し、張り切って生活してきた。

遊び方についても、戦いごっこばかりしてきた子どもがお店やさんごっこをしたり、室内で遊ぶことが多かった子どもが園庭での遊びを好んでしたりするなど、興味をもっていることが変わってきた。とること・集めることに主な興味をもっていた木の実や虫に関しても、年長になり、大事にすることにも少しずつ関心が向いてきた。

その中で、特に生き物に関しては、捕まえたカニやオタマジャクシなどを入れた飼育ケースを持ち歩き、ごっこ遊びをしているときも側に置いておく姿や、友だちと一緒に眺める姿が増えてきた。担任は、それらの姿から、子どもたちが自分で捕まえた生き物を大切にしようとする気持ちが大きくなってきたととらえた。そこで、捕まえた生き物を上手に飼うことができるよう、子どもと飼い方を相談したり、飼い方が載っている本を用意し、調べることができるようにしたりしてきた。その結果、年少のときは捕まえることが少なく、園で飼ったこともなかったトンボも、園で飼いたいという意欲がでてきた。飛び回ることでできるスペースを確保すれば飼えることを担任が伝えると、段ボールをくっつけ、すみかを作ったり、水場や空気の入るところが必要だということを考えたりして、飼い方を工夫してきた。

飼っていたトンボが死んでしまったときは、2時間近くもお墓作りに関わる子どもたちがいた。お墓を踏まれないように目印の旗を立て、花を供えたり、お墓に参るよう友だちに呼びかけたりし、見ていた子どもたちも、通りがかりにお墓に手を合わせる姿があった。また、他クラスの子どもたちが飼っていたカニが死んでしまったときに、悲しんでずっと側にいた子どもたちもいた。

上記のように、6期の生活では、自分が捕まえた生き物や飼ってきた生き物を大切にしようとする姿が多く見られた。また、自分がこだわりをもって関わってきた生き物ではなくても、大切にすることが少しずつ芽生えてきたと考える。その気持ちをさらに広げたいと願い、7期の構想を立てる必要があると考えた。

(2) 生き物と関わる経験と保育で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

先述した様に、今期は、自分が捕まえた生き物に限らず、学級で飼っている生き物や友だち

が捕まえた生き物など、生き物の全てを大切にしようとする気持ちを育てていきたいと考えている。今期は6月初旬から始まる。バッタやカマキリなど、6期には見られなかった虫が園庭に現れ、だんだんと大きくなり、保育室の卵からも赤ちゃんが産まれる時期である。前期と同じように、大切に飼っていた生き物の死を目の当たりにすることも予想される。これらを経験し、命や死について子どもなりに感じ、考えていくことで、生き物を大切にしようとする気持ちが育っていきと考える。また、生き物を大切にしようという気持ちがあるからこそ、生き物についてより深く考えることになる。

本園では、保育における思考力・判断力・表現力を次のようにとらえている。

○思考力・判断力…自ら興味をもって環境にかかわり、自分の願いを実現するためにどうすれば良いか考えたり選択したりする力

○表現力…感じたことや考えたことを自分なりの方法で表したり言葉で伝え合ったりする力

7期の生き物と関わる経験を通して、子どもたちはさまざまな思考・判断をし、考えたことを行動に表したり友だちと考えを伝え合ったりすることが予想される。例えば、生き物を大切に飼おうという願いをもったとき、よりよい状態で生き物を飼うためにはどうしていくか、年少のときのことや家で生き物を飼った経験を思い出したり本や図鑑で調べたりする必要がある。また、動かない生き物を見て元気がないと思うのか、休んでいると思うのかなど、生き物の様子を見てどのように思うかは、それまでの子どもの経験から変わってくる。そのため、生き物を大切に飼おうとする方法も子どもによって異なるが、その考えを友だちと伝え合い、それぞれが納得して飼っていかなければならない。さらに、生き物にとってより良い環境とはどのような環境なのかを考え、弱りやすい生き物は捕まえないようにしたり、そのことを知らない友だちに教えたりするようになる。特に、バッタやカマキリの卵、カメなど、クラスみんなで飼っているものについては、飼い方をどうするかみんなで考えることで、友だちの思いを知ったり自分の考えを確かなものにしていったりすることができる。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する友だちとの関わりを大切にしたい場面の構想について

生き物を大切にしようとする子どもたちの気持ちが、より深く考えることにつながっていくよう、7期は、特に次のような場面を大切にしていこうと考えた。

まず、保育室のカマキリとバッタの卵から赤ちゃんが産まれる場面である。生命の誕生を見て心を動かしている子どもたちに共感するとともに、産まれた赤ちゃんをどのようにすればよいのかを、クラスみんなで考える場をもつ。生き物を大切にしたいという思いは同じでも、逃がしたいと考える子どもと上手に育ててみたいと考える子どもがいると思われる。それぞれの考えを引き出すことで、子どもたちが自分の考えを伝え合い、互いの気持ちを知るとともに、考えの違いをどうしていくか、より深く考えることができるであろうと考える。

次に、クラスで飼育する生き物が死んでしまう場面である。6期では、自分が捕まえた生き物や飼っている生き物が死んだとき、お墓を作り、みんなに呼びかける姿があった。7期では、子どもたち全員に、生き物の命の大切さや不思議さについて、自分なりに考えてほしいと願っている。そのために、クラスで飼育している生き物が死んでしまったとき、クラスみんなで考える場をもつ。お墓を作るということに加え、それぞれの子どもたちの気持ちを引き出し、命について考えたり、改めて生き物の捕まえ方や飼い方を考えるきっかけとしたりする。

これらのことを経験した子どもたちが、その経験をいかすことができるよう、夏休みに、クラスで飼っている生き物をどうするかを考える場をもつ。長い休みの間、生き物の世話をする必要のあることを考える場をもつことで、捕まえた生き物を飼い続けるには世話をしないとけないことや、そのためにどうすれば良いかを考えられるようにする。

さらに、上記の場面に関わらず、思考・判断の基となる経験として、生き物を見つけたときや捕まえたときなどに、みんなで生き物を眺めたり関連する絵本や図鑑を見たりする場を設定する。これらの場面を通し、自分の考えをみんなと伝え合いながら、一つのことに向かってみんなで考えていく経験をさせたい。その経験が、運動会やこどもまつりなど、8期以降のみんなの一つのことで作り上げていくことにつながっていくと考える。

はたらきかけとしては、子どもたちがより深く考え、考えたことを伝え合っていくために、生き物を大切にしようとする子どもの願いに共感し、「どうしたらいいと思う？」などと、子どもがさらに考えられるように声かけをしていく。また、捕まえた生き物を上手に飼おうとし、飼い方を調べたり自分なりに考えてすみかを作ること、上手に飼えないのであれば捕まえないこと、捕ることだけを楽しんでいる友だちには「捕まえると弱る」と伝えることなど、自分で考えたことを言動に表している姿を認め、上手に捕ったり飼ったりしたいという思いが実現できるよう支援していく。伝え合いの場面では、子どもたちが多様な考えに触れ、さらに深く考えたり自分の考えを確かなものにしたりとできるよう、子どもによって異なる気づきや考えを取り上げていく。

3 予想される生き物との関わりを展開

時期	具体的な子どもの姿(◇印は伝え合い)
6 6 6 6 7 7 9 月 月 月 月 月 月 月 初 中 中 中 初 中 初 旬 旬 旬 旬 旬 旬 旬 旬 旬	<ul style="list-style-type: none"> ・捕まえた生き物のすみかを自分なりに工夫して作ったり、世話をしたりする。 ・自分の経験をもとに、飼うとすぐ弱る生き物を捕まえることはやめたり、捕まえても逃がしたりする。 ・すぐに弱る生き物を捕まえている友だちに、そのことを伝える。 <p>◇卵から産まれたカマキリやバッタの赤ちゃんを、どうすれば良いか考え、みんなと考えを伝え合う。</p> <p>◇クラスで飼っている生き物が死んでしまったときに、生き物の命について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長く飼おうと意識して生き物を捕まえ、本で調べたり担任に聞いたりしながらすみかを作る。 <p>◇クラスで飼っている生き物を、夏休みにどうするかを考え話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きく成長したバッタやカマキリなどに興味をもって関わったり、初めて見つけた生き物のことを調べたりする。

4 保育の実際

(1) 元気でいてほしいという思いをもって生き物を飼おうとする子どもたち

チョウを捕まえた園児A、園児Bは、大きな飼育ケースにチョウを入れようとするが、蓋がなかったため、自分たちでダンボールの蓋を作った。また、園児Aと園児Bは、メダカを捕まえるとすぐに弱ってしまった経験から、上手に飼う準備ができていないときにメダカを捕まえることはやめていた。

そのことから、担任は、2人がチョウを弱らせないようにしたいという気持ちで飼おうとしているのであろうととらえた。そして、チョウを飼うには2人が選んだケースよりももっと広いスペ



段ボールの家にビニールの窓を
ガムテープで貼る園児A、園児B

ースが必要であることを2人に伝えた。

2人は、以前園児Cがトンボの家に使っていた段ボールを修理し、チョウの家にするを思いついた。先ず段ボールの中をきれいに掃除し、次に、ダンボールが丈夫になるよう、ガムテープで補強した。ダンボールを補強するときには、ガムテープだけではうまくいかないため、担任のヒントで割りばしを利用した。そして、家の中が見えるようにつけたビニールの窓を、ガムテープで貼り直した。

チョウを飼育ケースから段ボールの家に移すときにも、「一回アミに入れる?」「じゃあ反対にしたら?」などと、さまざまなことを試し、考えを伝え合いながら、チョウの引っ越しをしている姿が見られた。

園児Aと園児Bが、蓋を作ってまで大きな飼育ケースにチョウを入れようとしたのは、チョウには広いスペースが必要であると考えたからである。これまで2人は、狭い所ではチョウは生きられないことを母親から教えられ、チョウを捕まえても逃がしていた。担任は「広い所であればチョウを飼えるのではないか」と2人が考えたことが、本当であるという経験をしてほしいと願い、チョウを飼うにはさらに広いスペースが必要であることを



飼育ケースから虫捕りアミに、チョウを移そうとしている園児A、園児B

伝えた。その後、2人はチョウのために何時間も段ボールの家を作り続けたが、これは、チョウを元気な状態で飼いたいという強い願いがあったからこそできたことではないだろうか。また、ダンボールを補強するときには、以前友だちが剣作りで割りばしを使用したのと同じように割りばしを使うことで、折れ曲がっていた段ボールをまっすぐにすることができた。固いものが支えになることを、友だちの遊びの様子から学び、その経験を基に、割りばしをどのように利用すればよいかをすぐに理解することができたと考える。2人がチョウを移動させるときは、チョウを逃がさないよう、飼育ケースの蓋と段ボールの家の入口をくっつけることを思いついた。このことも、以前虫かごからチョウを取り出すときに逃がしてしまった経験をいかして考えついたことであろう。

(2) 生き物の死と誕生を続けて経験する中で、バッタの赤ちゃんをどうするか自分の考えを伝え合った子どもたち

6月になり、園庭のひょうたん池でメダカを見つけた子どもたちは、メダカ捕りを始めた。このメダカは、子どもたちが楽しんで生き物と触れ合えるよう、地域の方が池に放してくださったものである。6月11日、捕まえていたメダカが休み明けに死んでしまい、みんなでメダカの飼い方と捕り方を考えた。子どもだけでメダカを上手に飼うのは難しかったため、担任が手伝うこととなった。また、この日は園庭でバッタやカマキリの赤ちゃんを発見し、捕まえた子どもがいた。



産まれたばかりのバッタの赤ちゃんを発見し、眺める子どもたち

6月12日の朝、保育室の飼育ケースの卵から、カマキリの赤ちゃんが産まれた。「赤ちゃん産まれたよ。」と友だちに教える姿や、友だちと一緒に飼育ケースを覗き込む姿、「ギャー、カマキリがいっぱいいるー。」と叫ぶ姿など、カマキリの赤ちゃんが産まれたことを喜ぶ姿がたくさん見られた。

6月13日、飼育ケースの卵からバッタの赤ちゃんが産まれた。蓋の隙間から出てくるバッタ

の赤ちゃんを見て、園児Dは「逃がしてあげたら？そのほうが家族が見つかるかもしれないし。」と言ったが、園児Cは「出てきたら全部捕まえる。」と、飼いたい気持ちが大きかった。担任は、バッタの赤ちゃんをどうするか、伝え合う場をもち、子どもたちみんなと考えることにした。

子どもたちは口々に「飼いたい。」「逃がしたい。」と言っていたため、担任は、前日産まれたカマキリが、飼育ケースの中で死んでしまっていることを伝えた。すると、「人間ほど長生きじゃない。」「死んだらかわいそう。」という園児Eと園児Fの考えを聞いて、それまで「逃がしたくない。」と言っていた子どもも考えを変えた。他の子どもたちがバッタを逃がそうとする中、園児Cは「大きくしたい。」という気持ちをみんなに伝えた。園児Cは、広い所できちんと世話をすれば、バッタは死なずに大きくなるはずだと考えていた。「何匹逃がす？」と、園児Cがみんなに聞いたのも、飼う数を制限すれば飼育ケースが広く使えると考えたからであった。

その後子どもたちは、バッタを飼うのか逃がすのかを、さらに考え、いろいろな考えを伝え合った。

この事例では、子どもたちが生き物の誕生や死を目の当たりにした。感動した経験、悲しさを感じた経験が、捕り方や飼い方をどうすれば良いか、バッタの赤ちゃんをどうするか、一人一人が本気で考え、みんなが納得できたことにつながったのではないかと考える。バッタの赤ちゃんが産まれたときは、「自分でみつけた遊び」の途中であったが、クラスのほとんどの子どもがバッタの赤ちゃんを見て、それぞれの思いを言葉に表していた。伝え合う場でバッタの赤ちゃんをどうするか考えたとき、担任はカマキリの赤ちゃんの死のことを子どもたちに伝えた。さらに、園児Cの考えを取り上げたことで、子どもたちはより深く考えることになった。生き物を大切にしたいという気持ちはみんな一緒である。そのため、みんなが一生懸命に考える。それまで経験したことの違いから、逃がさないと死んでしまうという考えをもった子どもと、上手に飼えば大丈夫だという考えをもった子どもがいたが、その両方を取り上げることで、互いの考えに目を向け、さらに深く考えることになったのではないだろうか。

(3) 自分なりに死について考えながらザリガニのお墓を作る子どもたち

7月10日、クラスで飼っていたザリガニのうちの1匹が死んでいるのを、園児Fが見つけた。担任はすぐに伝え合う場をもち、全員がザリガニのお墓を作りに園庭に出かけた。年少のときにお墓を作った経験から、中学校の外階段の下に埋めることになった。スコップで、それぞれ好きな場所に勢いよく穴を掘る男の子たちに向かって、園児Aは「遊びじゃないんだよ。」と注意をした。注意をされた男の子たちは、それを受け止め、みんなで一つの穴を掘っていった。また、園児Gは「お兄ちゃんたちに見つからないかな。」と近くにいる中学生を気にかけていた。



クラスの全員が自ら参加した
ザリガニのお墓作り

7月19日、飼っていたザリガニがまた死んでしまい、園児Gが見つけた。園児Gはすぐにお墓を作ろうとしたので、担任はみんなに声をかけた。このザリガニは、先日死んだザリガニから産まれてきたものである。以下は、お墓を作る過程で聞かれた会話の一部である。

園児G「お母さんの隣に埋めてやったら同じ天国行ける。」

園児H「別れてしまったから死んでしまったんじゃない？」

「お母さんと一緒に埋めてやらないと。」

園児I「そうだよ。お母さんと一緒に埋めてやらないと。」

園児E「天国行けると思うよ。」

7月10日は保育公開日であり、事前に予定をたてていたが、ザリガニのお墓作りを優先した。子どもたち全員が自ら参加したことからも、ザリガニへの思いがうかがえる。埋めた場所は、年少のときに、雨が降らず、土もある場所を探して選んだ所である。6月15日にも、園児Hがそのことを思い出し、家から連れてきたカニを同じ場所に埋めている。子どもたちは以前の経験を思い出してザリガニを埋めるとき、男の子たちの様子を見て、真剣ではないと感じた園児Aは、男の子たちに注意をし、注意された男の子たちも気持ちを改めて穴を掘った。園児Gは、中学生がお墓を触らないかと心配していた。これらは全て、ザリガニのことを思う気持ちから表れた姿であると考えられる。

7月19日にザリガニが死んでしまったときは、子どもたちの気持ちがさらにはっきりと表れた。「お母さんの隣に埋めたら同じ天国に行ける」という園児Gの気づきに他の子どもたちも賛同し、子どもと母親のザリガニが一緒の天国に行ってほしいという同じ願いをもってお墓を作った。スコップで土を掘るときに慎重に時間をかけて掘っていたことから、心を込めていたことがうかがえる。

(4) 生き物にとってどうすることが一番良いのかを考えて話し合った子どもたち

7月19日、ほし組で飼っている生き物を、夏休み中にどうするかということ話し合った。園児E、園児Jが「逃がしてやる。」と言い、すぐに他の子どもたちも賛同した。しかし、園児Aが「(逃がしても誰かに)捕られるよ。」と言い、担任がその言葉を取り上げたことで、もう一度みんなが考え直した。最後は「担任が世話をして死なせないようにする。弱りそうだったら弱る前に逃がす。」という考えに全員が納得した。

この日園児Aは、チョウを捕まえた年少の子どもに、「逃がしてよ。死んでもいいんだね。」「(飼うのなら)広いところじゃないと。」と言っている。このように、生き物にとってどうするのが良いのかを普段から考えているからこそ、みんなで話し合ったときにも、逃がすだけでは誰かに捕られてしまうという気づきにつながったのだと考える。園児Aの気づきを取り上げたことで、単に逃がすという結論に行きつくのではなく、生き物にとって一番良い状態はどのような状態であるのかを改めてみんなが考えることができた。

5 成果と課題

気づきや経験をいかすという姿の現れた事例を紹介してきたが、どの事例でも、その姿が表れてきたときは、背景に子どもの強い願いが存在している。こうしたい、こうなってほしいという願いをもっているときにこそ、考えたり今までしてきたことを思い出したりし、気づきや過去の経験をいかしている姿につながっていった。教師がその願いを見とり、願いが実現するためのヒントを与えたり、伝え合う場を設定し、それぞれの子どもの願いを引き出したりすることが大切なはたらきかけであったと考える。しかしながら、子どもたちがもっている願いが同じだとしても、それぞれの子どもが、それまで経験してきたことや気づきは異なる。そこで、その異なった考えを取り上げることで、子どもたちは違う面にも目を向け、さらに深く考えることができるようになっていった。

今回の事例では、いろいろな視点で考えられるよう、子どもの気づきの違いを意識して取り上げたが、ややもすれば子ども同士の言い合いで終わってしまう可能性もあった。教師が個々の子どもの願いを見とり、それぞれを大事にしていくと共に、しっかりとしたねらいをもち、学級全体の伝え合いとなるようにしなければならない。そうすることで子ども同士が互いの考えに刺激され、より深く考えることにつながっていくと考える。

(文責 内田 祐)